



本文で取り上げたイラスト内容

1.はじめに

タイムスリップイラストの願い

イラストが教科書に載ったのは h 18 版帝国書院教科書からだが、これは暗記に陥りがちな歴史学習を、生徒が事象を肌で感じ取る豊かな学びに転換したいという h14 版から一貫する執筆スタッフの願いを実現したものである。筆者はそれぞれのイラストの原案図を作成提案してきた。今回、原始・近現代の新たなイラスト 3 枚が追加され、各時代が出そろったことになる。ここでは、1960 年代前半の様子を示す現代のイラスト 9 を使って戦後の高度成長を授業で扱う視点を提案する。

2. 3年生にふさわしい現代史を

今回の 2012 年指導要領から近現代は 3 年生 40 時間で扱うことになった。イラストの活用は、1・2 年生ならば時代への興味関心を呼び起こすこと中心だったのに対し、3 年生ではより抽象的で発展した内容につなげる活用の仕方をしたい。イラストの実物が身近に豊富にあるのだから、興味関心にとどまらず、事象の背景にある大きな歴史の動きの理解を深める指導支援をしたい。

3. 高度成長の背景を授業する

私は戦後の高度成長の授業では、生活の大きな変化を具体的に体感理解するところから始めて、その背景となった歴史の枠組みを理解させることを主眼に授業を構成してきた。高度成長を成立させた歴史の枠組みは以下の 5 点にまとめている。

- ① 55 年体制の「軽軍備・経済発展優先」
- ② 冷戦体制下の対米従属・依存
- ③ 石油エネルギーへの転換
- ④ 国内消費市場の成長と輸出進展
- ⑤ 女性の人権向上と新しいライフスタイル

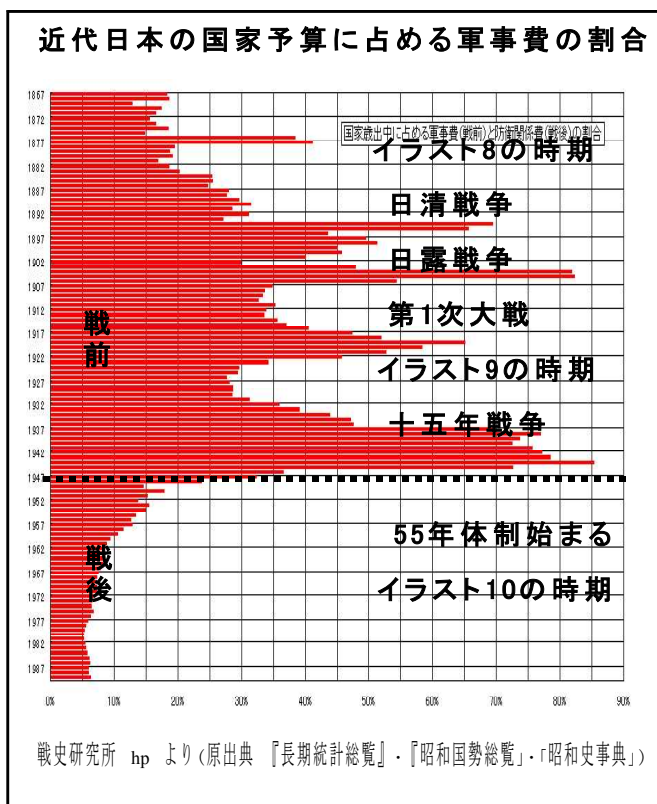
これらの要因が様々につながりながら戦後の日本の大きな変化が進み、その結果できた枠組みは、21 世紀初頭の現在も大きく私たちが規定している。授業ではイラストの様々な事象を取り上げ、上記の 5 項目に収斂させていくやり方をするとうい。以下その 5 項目に結びつけるイラスト上の内容を説明する。

① 軽軍備・経済優先

このイラストは、オリンピック開催の期待にあふれ、新幹線が開通したばかりの 1964 年の秋の時期を描いている。筆者のイラスト原画

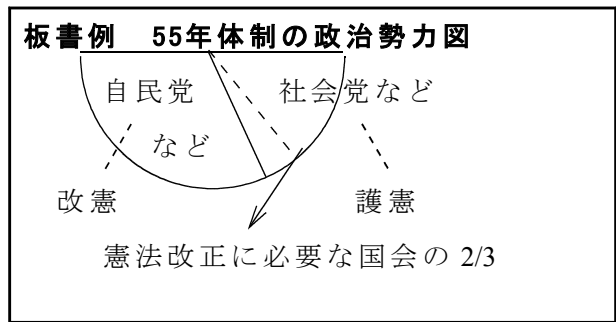
では、上空の青空に自衛隊のブルーインパルスが五輪を描くシーンを入れていた。

この時期の風景で特徴的なのは、イラスト7・8 と比べ、軍人が消え、階級対立や政治対立がないことである。7 では自由民権運動 8 では無産運動・普選運動がイラストの中心風景として登場するが、このイラストにはない。ないことが特色なのである。これこそ軽軍備・経済優先の 55 年体制の風景である。戦前と比べ、戦後の日本の軽軍備がどれほどだったかは下のグラフで比較することができる。



高度成長を推進した 55 年体制は、憲法「改正」をねらう自民党が社会党にたいし国会の 3 分の 2 ラインを超えられない状況が背景にあった。左右の政治スローガンの激突は 60 年安保・三池闘争を最後になくなっていき、経済成長の成果をどう配分するかをめぐる「春闘」の賃上げだけが意識されるようになった。政治上の国民的合意が形成されたわけではないが、経済成長に対立が吸収されたのである。

まずイラスト全体の「軍事・政治色のなさ」に気づかせ、その背景へ話を深めるのである。



②冷戦の枠組みの中の閉じた箱庭

同じくこの「ない風景」を探す作業として現在との比較ができる。高度成長は現在の生活の基礎を作ったが、現在と比べての大きな違いは、ニューカマー外国人・輸入品がないこと、携帯やパソコン・デジタルテレビなど IT 製品がないことであろう。ドルショック・プラザ合意以前の 70 年代初頭までの日本は、米ソ冷戦体制の枠組みの中でアメリカの手のひらにのった小さな存在だった。1 ドル = 360 円という円安固定相場のもとで、外国旅行は夢の話、輸入品はデパートの物産展の欧米高級品か、たまに見かけるアメリカ車しかなく、



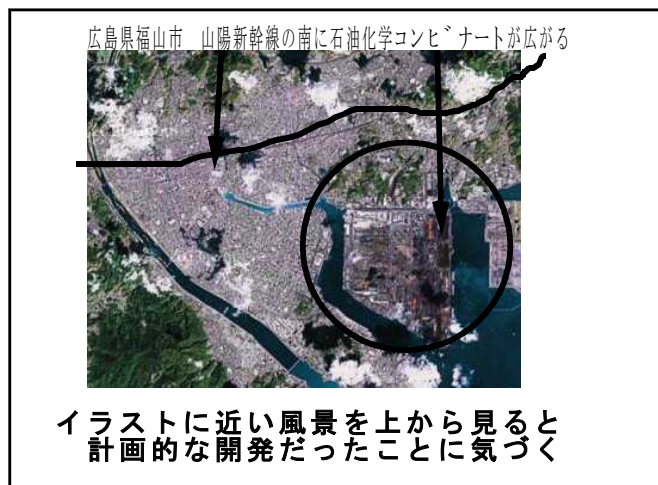
外国人は修学旅行で京都に言ったとき英語で話しかける練習をするほど珍しかった。

国内市場は円安と関税により強力に保護され、国内の安価な労働力による繊維雑貨などの軽工業製品をアメリカに輸出しながら成長のきっかけをつかもうとしていた。国民はそ

の狭い平和な箱庭にいたのである。箱庭の中には「三丁目の夕日」の風景が広がっていた。

③石油と重化学

その箱庭を、ガリバーの手のようにマクロの視点から一気に工業化させたのが高度成長である。石炭から石油への転換をてこに「石油化学コンビナート」によって日本の工業を一気に重化学工業化させる「全国総合開発計画」は、大蔵省・通産省・経済企画庁の官僚が立案し、経済界と協力して実行した戦後世界最大の国土開発だった。戦前のニューディールと同様ケインズ政策を応用し政財官が一体となって、国民経済を一挙に拡大した。成功の原因は安価な石油に目をつけた官僚の先見性である。イラスト左上の煙突とホッパー（貯蔵庫）は火力発電所と輸入鉱産資源を示してい



る。この向こうにはおそらく太平洋と港湾、コンビナートがあるはずである。こうして鉄鋼・エチレンなどの素材を世界に輸出し、日本は成長を始めたのである。最初は重化学の素材産業だった。これがやがて消費財の機械工業にシフトしていく。

④国内産業保護と消費市場の成長

繊維雑貨の軽工業からより高度な機械工業に発展していった理由は何か。それは戦後の日本社会が、憲法 25 条の規定の下で貧富の大

きな格差拡大を伴わずに消費財の国内市場が順調に拡大したからである。戦前の日本が財閥中心で軍事生産に傾斜していたことと好対照をなす。戦前の日本は寄生地主制という半封建制に規定され、貧富の差が大きく国内市場が狭かったため侵略戦争に走った。戦後の日本は、ニューディールの理想を形にした新憲法の枠組みが国民経済を豊かにし、国内消費市場を大きく広げたのである。国内消費財は保護関税によって外国製品から守られ、独



このメーカは戦前は戦闘機を作っていた。スハールという名前は、空を飛びたい技術者の夢が込められている



オート三輪は、輸送機械の分野で軽自動車・原付自転車と並んで戦後日本の国内消費財機械工業の市場を広げ質を高めていった



プリント基板の開発によって一価格が下がったテレビ



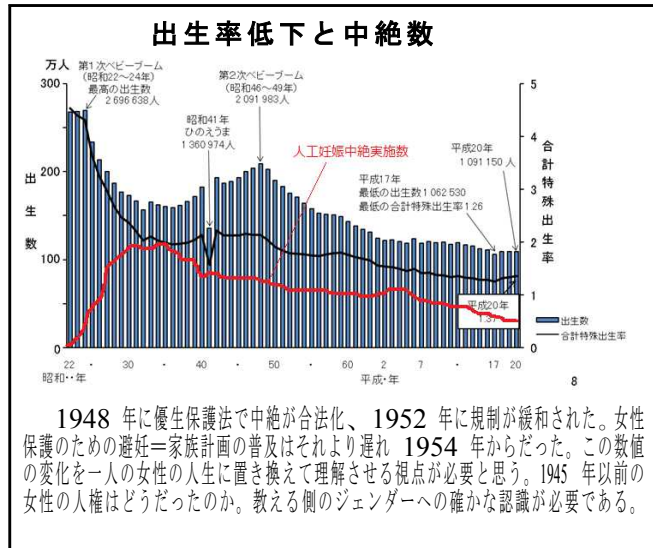
豆腐をまだ自転車で売り歩いているが、この後プラスチック容器が普及し、スーパーでの大量販売が可能になる。冷蔵庫が大型化していく。

禁法で複数の国内メーカーの競争が存在することで国産製品の品質を向上させていき、1970 年以後消費財を海外に輸出していく。国産の消費財技術・サービスの質が世界水準に達しえたのは、この時期に国内の消費者の地位が購買の主体として向上していたからである。では、消費者の地位はなぜ向上したのだろうか。

⑤女性の人権と家族・労働の変化

最初に流行した家電が洗濯機だった。女性の地位が向上したことが国内市場が成長させる背景になったことはすぐわかる。ただ、ここではもっと本質的な問題まで追究したい。

授業で触れられないことが多いが、女性の人権と健康＝リプロダクティブライツアンドヘルスの向上は高度成長の大きな理由の一つであり、中学校 3 年となれば社会科の授業で教師がしっかり向き合って扱うべき内容と考えるがどうだろう。



1950年から5年間の出生率の大幅な低下は、中絶が合法化され、その結果中絶数が激増したからということがはっきりわかる。それを追いかける形で、厚生省が保健行政で家族計画を推進し、避妊を保健所が普及させていった結果、出生率は低位で安定したのである。

こうして70年代には、「正社員の父親・専業主婦・子供2人」という核家族モデルを政府が「一般的な家族」と規定し、社会保障・賃金・税制すべてがこのモデルを基準に制度設計されていった。イラストからは、次のような人生設計を想定できる。集団就職の中学生が正社員として採用され、やがて職場結婚をし、公団アパートに入居、子供ができ、家族を扶養する賃金を獲得していく。女性は結婚出産によって退職し、男性に扶養される専業主婦となる。これが「幸せ」だとされ「努力すれば実際に実現が可能だ」という教育が行われた。放課後空き地で遊ぶ子供は、やが

て70年代後半になると、空き地はなくなり、よりよい大学・大企業をめざして塾に居場所を変え、ここから消えていくことになる。

4. おわりに 高度成長を超える視点

21世紀の現在の子供たちにこの授業はどんな意味があるのだろうか。高度成長の背景を考えさせる意義は、その枠組みを乗り越える認識を育てることにあると私は考えている。

高度成長は、近代日本の歴史上最大の成功体験である。半封建制から脱却し、最高寿命を実現させ、豊かな生活を手に入れた。もちろん環境破壊や過疎過密など負の側面もあるが、高度成長以前の社会に戻ることは考えられないだろう。大切なのは、高度成長が再来することは不可能で、授業のねらいはそれを明らかにすることにある。前述した5つの条件が現在すべて継続できなくなっている。

「夢よ、もう一度」がかなわないことが、現在の日本社会の閉塞感となっている。これは日露戦争という成功体験に酔って、満州事変以後の破局へ進んだ時期とよく似ている。この時、「日本資本主義発達史講座」の山田盛太郎や野呂栄太郎は、破局を止めようとして日本の資本主義の半封建的構造の原因である寄生地主制をはっきりと指摘した。そのような合理的な認識を生み出す生徒を育てたい。

現在の日本社会では何だろうか。結論を急ぐようだが、一つは、硬直した性別役割分業、とくにジェンダーに基づく「男子正社員・女子パート専業主婦」というライフモデルだろう。男女を問わず個人が家事と労働を両立し、同一労働同一賃金が支払われる仕組みの実現が、この閉塞を超えて新しい社会の枠組みを築く大きな一歩となるはずである。そういうことを考える深さを持って授業に望みたいと思う。